

フィンランドの幼稚園成立と国民学校思想に関する一考察

ーハンナ・ロートウマンの幼稚園実践の検討からー

伊藤 喬治

本稿では、フィンランドにおいてフレーベル主義に基づいた幼稚園実践がなされた事例として、1880年代に「ペスタロッツ=フレーベルの家」に留学し民衆幼稚園実践について学んだハンナ・ロートウマンと彼女による幼稚園を取り上げ、彼女の生い立ちや幼稚園実践に至る過程、そして二つの幼稚園実践について検討を行った。そこから、ハンナ・ロートウマンは当初、フィンランドの国民学校思想の文脈とドイツの民衆幼稚園思想の文脈の双方を持っており、また1883年に設立した幼稚園ではそれらを統合する形での実践が目指されていたが、1888年に設立した幼稚園である「ヘルシンキのフレーベルの家」では、それまでの国民学校思想の文脈から離れ、実践としても「ペスタロッツ=フレーベルの家」をモデルとした民衆幼稚園として作られたものであり、またそこでは教員養成も含め、総合的な民衆幼稚園実践として新たに体系化された点が明らかとなった。

キーワード

フィンランド 保育 民衆幼稚園 ハンナ・ロートウマン 国民学校

1. はじめに

筆者はこれまで、フィンランドにおいては、19世紀前半には地方を中心に幼児学校が複数設立され運営されてきたこと、また19世紀半ばにはフレーベルの思想が複数の思想的潮流の中から輸入されてきたこと、そのうち「フィンランド教育の父」と称されるウノ・シグネウスによって幼児を含む子どもを対象とした教育施設として実践の形で行われてきたことを明らかにし¹、またフィンランドの現代の施設に通ずるフレーベル主義に基づいた幼稚園の実践及び保育者の養成としては19世紀終わりにハンナ・ロートウマンによって設立された幼稚園がその中心となることを明らかにした²(伊藤、2015)。そのなかでは、1883年に設立された幼稚園と1888年に設立された幼稚園についてその違いについて検討を行うことによって、1888年の幼稚園がフィンランドにおいて「最初の幼稚園」とされてきた理由について検討を行った。一方で、これら幼稚園の成立について、その設立者であるハンナ・ロートウマン自身やその取り組みの変遷については検討することができなかった。そこで本稿では、フィンランドの保育体系において現代に通ずるシステムの始祖といえる1888年の幼稚園を設立したハンナ・ロートウマンについて、その思想および活動について検討することを目的とする。

2. ハンナ・ロートウマンと幼稚園思想

ハンナ・ロートウマン(ヨハンナ・ソフィア・ロートウマン、Johanna Sofia Rothman)は、1856年9月10日にヘルシンキの薬剤師であり病院に勤務していたニルス・ヴィルヘルム・ロートウマン(Nils Wilhelm Rothman)と、ソフィア・ロヴィンサ・ロートウマン(Sofia Lovinsa Rothman)の娘として生まれた³。二人ともスウェーデン系の家系であり、ハンナもスウェーデン語を母語として育った。父親のニルスは1866年、ロートウマンが10歳の時に亡くなった。そのためその年から、ロートウマンと母のソフィアは、伯母であるヨハンナ・ロビンア・マテニウス(Johanna Lovinsa Mathenius)のもとへ引越し、そこで伯父夫婦と祖母と一緒に生活することになった。伯父夫婦は、二人とも郵便局で働いていた。母親のソフィアは仕事をしていなかったが、夫を失ったことで少額の給付金を市から得て生活していた。そのため生活は裕福なものではなかったが、伯父と伯母は家庭的であたたかく、幼い姪であるロートウマンの面倒をよくみて、ロートウマンは幸せな子ども時代を送ることができた⁴。また、ロートウマンは生涯、母親と伯父夫婦と生活した。そのためロートウマンは、自分の生活のすべてを幼稚園の事業と、子どものための福祉活動にささげることができた⁵。また、ロートウマンは結婚する事がなく、自身の子どもを持たなかった。

ロートウマンは幼いころ、背中に怪我をしたことで、背骨に後遺症を残す事になった。また、他の怪我により、片方の視力にも障害を残す事になった。しかし、幸せであたたかい家庭生活を送り、彼女は健やかに成長し、またこの経験から、幼児への教育や福祉に関心を持つようになった⁶。父親との死別などで、ロートウマンの家庭は中産階級の中では貧しく、不幸な環境であったが、ロートウマンは強く、頑強で熱意のある心を持っていたとされる⁷。

ロートウマンは家族から、多くの教育の機会を手に入れる事ができた。9歳になった1865年から18歳になる1874年にかけて、ヘルシンキの女子学校である「ヘルシンキのスウェーデン語女子学校」(Svenska Fruntimmerskolan i Helsingfors)に通い、その後1877年まで基礎教育を受けた⁸。この間、学校教員の養成課程を修了した。女子学校では、国民学校と国民学校における教育、また女性の社会進出に関して学んでいた⁹。また、同時に、そこで働いており、のちに1883年の幼稚園の共同設立者であるエリザベス・ブロンクヴィスト(Elizabeth Blomqvist)と親しくなった。この女子学校で学ぶうちに、ロートウマンはとくに幼児への教育に対して関心を持つようになったとされる¹⁰。

幼児教育に関して関心を持ったロートウマンは、女子学校の卒業後に R. ヘルシンギウス(R. Helsingius)によって設立された、私立の幼児のための学校(pientenlastenkoulu)で教員として働いた¹¹。そこでロートウマンは、さらに幼児教育にのめりこみ、そしてそこの活動での信頼と実績のために、教員の資格を取得した。

次第に幼児期の子どもの教育にのめりこんでいったロートウマンは、1881年の秋、ブロンクヴィストの推薦で、ベルリンにあるシュラーダー=ブライマン夫人によって設立された

「ペスタロッツ＝フレーベルの家」(Pestalozzi-Fröbel-Haus)に留学し、翌年の秋に卒業した¹²。これは、民衆幼稚園、財政的支援のための「ベルリン民衆教育協会」、媒介学級、劳作学校、初等学級、幼稚園女教員養成所を併せ持つものであり、「ペスタロッツ＝フレーベルの教育思想および教育実践の融合による、ベルリンの貧民および労働者の子女のための一大総合学園であ」ったとされる¹³。ここで、ロートウマンは、フレーベル主義の教育に独自の、遊びによる教育活動や、労働と教育に関しての知識、また子どもに対しての理論的な知識を得た。

「ペスタロッツ＝フレーベルの家」では、ロートウマンはオランダ人で実践幼稚園教員であったアネット・ハンミンク＝シェペル(Annette Hamminck-Schepel)に師事した。ハンミンク＝シェペルは、「ペスタロッツ＝フレーベルの家」の創設者であったシュラーダー＝ブライマン夫人のヴァトツームでの取り組みである「女子教育舎」¹⁴の生徒であった人物で¹⁵、後にロンドンにセサミハウスとその幼稚園教員養成所を設立した人物であった。ハンミンク＝シェペルの幼稚園への意識と献身性に、ロートウマンも強い影響を受け、またその後の生涯に渡って二人の間で交流があったとされる。「ペスタロッツ＝フレーベルの家」では、生徒はあらゆる国から来ており、生徒間の交流も国際的なものであった¹⁶。

ロートウマンは、「ペスタロッツ＝フレーベルの家」の創設者であったシュラーダー＝ブライマン夫人からも強い影響を受け、フィンランドでの幼稚園活動へつながる強い影響を受けた。たとえば、ロートウマンは、シュラーダー＝ブライマン夫人によって体系化され、教える場所となった「ペスタロッツ＝フレーベルの家」における幼稚園教員養成のためのカリキュラムから、ペスタロッツに関する知識やフレーベルの教授法について知ることができただけでなく、「ペスタロッツ＝フレーベルの家」での活動そのものから多くを学んだとされる。この施設が目指していた幼児教育は、学校としての施設ではなく、一般的な家庭をモデルとするものであった¹⁷。ここでロートウマンは、「家庭的な空間」を志向する幼稚園を目指すようになったとされる。また、この留学によって、自身が子どもに福祉を与えることが自身の天職であることを確信したとされる¹⁸。またロートウマンは、ここでの長い思索の結果、宗教的なことがらにも関心を持つようになった¹⁹。ロートウマンが、後に1888年の幼稚園を共同で運営したエリザベス・アランデル(Elizabeth Alander)にあてた手紙の中には、「神はいかにして現れ、そしてすべてのものに影響を与えるのか」「私たちは隣人の援助と慈悲として、どのような正しい行為をするのか」といった点について述べている²⁰。ロートウマンにとってこの確信は、理論だけにとどまるものではなく、彼女の取り組みの中で、子どもと家庭の福祉のために長い間実行されることとなった。

ドイツの「ペスタロッツ＝フレーベルの家」でフレーベル主義と幼稚園について1年間学び、翌1882年、ロートウマンはフィンランドに帰国した。「ペスタロッツ＝フレーベルの家」で強い影響を受けたロートウマンは、フィンランドにおいてもフレーベル主義の幼稚園のモデル園をつくることを計画した²¹。ロートウマンは民衆の教育者としての仕事にも関心

を持ち、またかねてより国民学校思想が彼女の関心に近いものであったために、ロートウマンは当初、国民学校に併設する形態での幼稚園の設立を計画していた。また当時のフィンランドでは、国民学校の教育は、女性の解放にも繋げられて考えられており、ロートウマンは、女性の社会化という側面からも、幼稚園教員の仕事に対して関心を持っていた²²。ロートウマンは後に、自身の出資で女子教育の支援をしたが、それは女性にとって、教育と社会における活動に関する新しい機会の創造を目的とするものであった。同時に、ロートウマンのこの思想は、フィンランドに対するナショナリズムから生まれたものでもあり、これらの充実が国家の将来をよりよいものにするものであるとロートウマンは考えていた²³。また幼稚園と幼稚園教員養成所を設立し、実践を行う以前にも、ロートウマンは多くの新聞や雑誌に、寄稿を行っていた²⁴。

ロートウマンの後の取り組み、つまり「最初の幼稚園」以降の取り組みの特徴はとくに、持続的な保護という保護の側面と、必要な発達を促進させるという教育的な側面の両面を持ち合わせていた点にある²⁵。その理念は、「ペスタロッチ=フレーベルの家」への留学から帰国した時にはすでに含まれていた。また、そこでロートウマンは、きちんとした職業であり、それぞれの発達段階において子どもから信頼を得て、子どもたちが大人になるまで強い影響を与えるものであるとし、教育者と、幼稚園教員の価値を重視し、幼稚園教員養成の重要性も認識していた²⁶。しかし、この理念は、すぐには実現しえなかった。

また、それだけではなく、幼稚園の教員を養成する事によって、ロートウマンはそこに女子教育、また女性の社会化といった視点が含まれていた。

3. フィンランドの 1888 年の幼稚園のカリキュラムについて

帰国したロートウマンは、自身による幼稚園を設立するために、学校高等委員会(kouluylihallitus)に対して 800 フィンランドマルクの借り入れを要求した。しかし、そのときには幼稚園の価値が周囲に認知されておらず、またロートウマン自身も幼稚園という事業を始めるだけの資格がないとみなされ、学校高等委員会からの資金援助の要請は拒否された。

結果として、ロートウマンは、1883 年の 1 月 15 日、ヘルシンキのユニオン通りに、自費で最初の幼稚園を開いた²⁷。この地域はヘルシンキ市内でもスウェーデン文化圏であり、中産階級の多い地域であった。ロートウマンには、幼稚園をするための経済的な援助するところもなく、また貧しい親たちは、幼稚園のための授業料を払う事もできなかったために、貧困層を対象とした幼稚園を運営することはできなかったとされる。そのため、ロートウマンによって最初に設立された 1883 年の幼稚園は、スウェーデン語を母語をする、中産階級の子どもたちを対象とするものであった²⁸。この幼稚園では、1860 年代にはシグネウスの国民学校運動の支援をしており、彼女の学生時代の教師であったエリザベス・ブロンクヴィストが彼女に共感し、この幼稚園の共同運営者になった²⁹。

しかし、この幼稚園は、純粹に幼稚園としての活動を行っていたのではなかった。この幼稚園は、幼児学校としての活動も行っていた³⁰。1883 年の幼稚園における活動は、幼稚園としての性格も取り入れられていたものの、午前は幼児学校としても活動しており幼稚園としての活動は午後 12 時から 14 時までと限られていた³¹。また対象とする子どもも中産階級の子どもであり、民衆幼稚園と呼ばれる性格のものではなかった(伊藤、2015)。この幼稚園では、共同運営者のブロンクヴィストにより、幼稚園や幼児学校が国民学校への準備教育、もしくは国民学校に付設される教育施設という側面を強く持っていた。また、先述の通り、ロートウマンは「ペスタロッツ＝フレーベルの家」に留学したとき以来、貧しい子どもを対象とし、彼らに保護と教育を与えることを幼稚園の目的としていたが、この幼稚園の存在していた地域はヘルシンキ市内の中層階級が多く住む地域であり、また実際に幼稚園が対象としていたのもスウェーデン人の子どもと、ロートウマンが当初目指していた、本来の意味での民衆幼稚園としての側面はあまり持ち得なかったといえる。

1883 年に始められた幼稚園は、子どもたちを集めてその活動は次第に大きくなっていったが、一方でロートウマンは、この幼稚園における取り組みでは、まだ子どもに関する問題の根源を解決する事にはならないと考え、満足する事ができなかった³²。ロートウマンは、当初より民衆幼稚園としての性格を持つ幼稚園を目指しており、実際の活動内容もフレーベル主義の幼稚園としての側面を持っていたものの、運営における経済的な問題や、一般や教育者からも幼稚園の理解の違いがあり、ロートウマンが求めていた、すべての子ども、特に貧困層の子どもを対象とした民衆幼稚園としては活動するに至らなかった。

4. フィンランドにおける幼稚園

そのような状況の中、偶然にもヘルシンキ小売商(Helsingin Vähittäismyynti)委員会が非営利目的の融資を行う事を聞いたロートウマンは、1888 年の 1 月に幼稚園の設立の資金援助について直接質問を行った³³。ここで委員であった A. L. ハートウォール(A. L. Hartwall)から理解が得られると、ロートウマンは民衆幼稚園に向けてより活発に取り組むことができるようになった。

同年 9 月 11 日、ロートウマンは、ヘルシンキ中心部のラピンラハデン通りに、「ヘルシンキのフレーベルの家」(Helsingin Fröbel-laitos / Fröbel-anstalt i Helsingfors: スウェーデン語)という名称で新たに幼稚園を設立した³⁴。この幼稚園では、対象は労働者の子どもたちであり、ロートウマンは社会的に弱い立場にいる子どもたちを保護することを目的とした³⁵。また、この幼稚園では、幼児学校としての活動はおこなわれなくなり、完全に幼稚園、とくにシュラーダー＝ブライマン夫人の下で学んだ民衆幼稚園として取り組むことになった。ロートウマンは、この幼稚園の設立にあたって、子どもを募集するために新聞広告を出している³⁶。この広告によれば、当初、この幼稚園としての活動と対象は、午後 12 時から、2 歳半の子どもから 7 歳の子どもに対して行うとされていた。また、保育

料は一日につき1フィンランドマルクであった。

しかし、幼稚園の取り組みはなかなか理解されなかった。親の理解や子どもを集めるために、街へ出て子どもに直接声をかけたが、幼稚園を始める前に集まった子どもはたったの3人だけであった³⁷。当初、幼稚園はその目的が理解されず、孤児のための慈善施設であるといわれていた。幼稚園は外から見ると、いくつかの木のベンチ、食器棚、テーブル、コート掛けがあるだけの、非常に質素なものであった。しかし、子どもたちが幼稚園の中では安全な生活ができるようになることが知られると、幼稚園に対する誤解は次第になくなっていった。子どもの数は、秋のうちに63人になり、春には73人になった。また、次の春には子どもの数は100人を超えた。そのために、それまでの部屋では狭くなるほどであった。この幼稚園では、子どもの年齢は、3歳から7歳を対象としていた。7歳の子どもは本来ならば基礎学校段階に相当していたが、当時は公教育の制度が十分ではなかったため、基礎学校年齢になっても学校に行く事ができずストリートチルドレンになっている子どもが多くいた。そのため、ここでは学齢期の子どもたちも預かっていた。また、この幼稚園では、子どもたちをそれぞれの発達の状況にあわせて三つの学年に分けていた。幼稚園は、午前の部には9時から12時まで、午後の部には14時から16時まで行われた。当時の保育料については、家庭の状況によって無料とする場合もあれば、月謝として集める場合もあった。

幼稚園の活動は子どものそれぞれの状況に合わせて行うことが目的とされた³⁸。また同時に、最初の年にはすべての家庭に公平に経済的負担が行われるようになっていた。

ここの取り組みのために、ロートゥマンは、さらに5人の、のちに幼稚園教員となる保育者を雇い入れた³⁹。この中には、後にロートゥマンの設立する幼稚園教員養成所で養成者として働いたものもいた。また、次の年になるとさらに二人の人物を幼稚園教員として養成した。また、ロートゥマン自身も、近くにあったラピンラハティの国民学校において、女性教員としても働いた。

ロートゥマンが、貧困層の民衆を対象に新しい幼稚園活動を始めるようになると、この取り組みは人びとの関心を集めるようになった。新聞でこの取り組みが紹介されたとき、ロートゥマンは新聞紙上で幼稚園教員職の募集と、資金援助を求めた⁴⁰。すると幼稚園活動は一般に知られるようになり、幼稚園とその教授方法は理解が得られるようになった。1890年には、他の新聞の編集者であったオッシアン・ロイター(Ossian Reuter)が、この幼稚園を訪問するように書き、幼稚園がたくさんの準備教育を子どもたちに与えている事を書いた⁴¹。幼稚園における活動が、主に子どもたちに規律、社会性、衛生を教えていることを強調した。また、彼は、この場所で子どもたちが話し、笑い、小さな子どもの精神を発達させている事に着目し、遊びの活動についても触れた。

この幼稚園は、遊びのほか、音楽教育としての歌唱、楽器の演奏、体育、指遊び、マーチなどが、一日の保育計画の中で行われていた⁴²。楽器の指導については、当時のドイツ

のヴィーゼンニーダー (Wiesenneder) の教授方法にもとづいて行われていた。また、幼稚園として完成するには、その原理にもとづいて保育を行うための、遊びの道具や人形などが必要であった。しかし、それを提供してくれる者が欠如していたために、設備としては充実したものではなかった。そのため、材料をあるもののなかから見つけて用意した。

幼稚園委員会の委員長であり、国民学校の調査官であったオーベリ (Öhberg) は、この幼稚園の取り組みと子どもたちへの影響に対して非常に満足し、このため、ロートウマンは 9 人の生徒とともに、オーベリから支援を得て次の幼稚園を設立する事を求められた⁴³。この援助によってロートウマンは、ヘルシンキ郊外の非常に貧しい地域に、次の幼稚園を設立する事ができるようになった。そのことによって貧しい子どもたちに利益と慈悲を与える機会を得た。

1890 年になると、ロートウマンは援助を得て、新しい幼稚園がヘルシンキの郊外の貧困層の多い地域であるソルナイネンの市街地の中につくられた。また、この幼稚園は、新たに作られたのではなく、「ヘルシンキのフレーベルの家」がソルナイネンに移転するかたちで行われることになった⁴⁴。この取り組みによって、この「ヘルシンキのフレーベルの家」の民衆幼稚園としての性格はより強いものになった。この幼稚園では、活動としてはそれまでの幼稚園を継承していたものの、対象として、貧困層の子どもを受け入れていた。当時のソルナイネンはヘルシンキ郊外の貧困な労働者が多く住む地域で、多くのストリートチルドレンがいた⁴⁵。1891 年には 130 人を超える子どもが在籍しており、5 クラスあったものの、そのうちフィンランド語を母語とする子どもたちがいたのは 1 クラスだけであった⁴⁶。それ以外は、スウェーデン語を母語とする家庭の子どもたちによって構成されていた。そのため最初はフィンランド語を話す幼稚園教員も少なかったが、次第にフィンランド語を母語とする子どもたちが幼稚園に来るようになるうちに増えていった。また、1891 年には「ヘルシンキのフレーベルの家」は、「国民の家」(kansankoti) と呼ばれる生活可能な建物を用意するようになった⁴⁷。この建物には 3 部屋あり、ここで家のない子どもや、幼稚園教員として働いている人物が生活できるようになった。

この「ヘルシンキのフレーベルの家」では、フレーベルの提唱した遊びによる教育活動が行われていた。絵画活動、歌唱、体操、積み木、人形といった活動が行われていた⁴⁸。また、ソルナイネンに幼稚園を設立した際には、潤沢な資金援助を受けた事で、多くの遊びのための教具や設備を整える事ができるようになった。ソルナイネンでは恩物も使われた。ここにおける幼稚園では、ロートウマンが「ペスタロッツィ=フレーベルの家」において学んできた、フレーベル主義の教育活動を実現させた。

ロートウマンは、幼稚園で働く人材を求めるために、フィンランド女性協会から人材を募集し、そのなかに、ともに幼稚園事業を行い、この幼稚園の 2 代目の園長になったエリザベス・アランデルがいた⁴⁹。民衆幼稚園としての活動は、ソルナイネンでは 1900 年より行われた。1892 年には、幼稚園に幼稚園教員養成所が設立された⁵⁰。1899 年には、借家

ではない、自身の施設の設立を求めて新聞に広告を出した⁵¹。その結果、20000 フィンランドマルク集める事ができ、1900 年からは、それを資金に新しい施設の建設に着手した。1907 年に、新しい施設が完成した。これは「エベネセー」(Ebeneser)と呼ばれることになった。1908 年 12 月 7 日、新しい施設が正式に開かれた。この施設の完成と共に、幼稚園の活動はより体系的で大きなものになった。「エベネセー」は、幼稚園、幼稚園教員養成施設を含む建物であり、デザインも「ペスタロッツ=フレーベルの家」を意識したものであった⁵²。

5. おわりに

以上のように、フィンランドにおいて「最初の幼稚園」とされた 1888 年の幼稚園以前から、その設立者であるハンナ・ロートウマンは民衆幼稚園への思想を持っていた。もともと、ロートウマンは、国民学校教育への関心から、幼児教育に関心を持つようになった。そこでドイツの「ペスタロッツ=フレーベルの家」に留学した事で、彼女はフレーベル主義の幼稚園における教育、特にシュラーダー=ブライマン夫人の民衆幼稚園思想に共感することとなった。しかし、ロートウマンによって 1883 年につくられた最初の幼稚園は、中産階級の子どもを対象とするもので、また幼児学校としての活動も行っていた。そののち、ロートウマンは資金援助を得ることで、より貧困な子どもを対象とする幼稚園を設立した。この幼稚園では、幼児学校としての活動は行わず、また「ヘルシンキのフレーベルの家」という名称をもちいた。1892 年からは、幼稚園教員の養成も体系化して行われるようになった。また、新聞によってこの幼稚園の活動が知られるようになると、新たに資金援助を得て、ヘルシンキ郊外の非常に貧困な地域であるソルナイネンにこの幼稚園を移転させた。この幼稚園では、当初はフレーベル主義の幼稚園としての活動を行っていたが、次第に住み込み可能な施設が用意されるようになり、また「エベネセー」に移転した以降は、施設保育に関する体系的な活動が始められた。このことから、フィンランドの施設保育の歴史については次の特徴がみられることが明らかとなった。まず、その設立者であるハンナ・ロートウマンは、フィンランドにおいてこれまで形成されてきた国民学校思想の流れで幼児期の子どもを対象とした教育に関心を持ち、当初は背景である国民学校思想と、民衆幼稚園思想の両者を想定していた。そのために実践や実態のレベルにおいては、1883 年の幼稚園ではフィンランドの幼児期の子どもを対象とした教育活動の文脈、つまりそれまでに受容されたフレーベルの思想を含むもののシグネウスの国民学校思想を受け継いだものであった。しかし、民衆幼稚園としての性格をより求めた結果作られた 1888 年の幼稚園である「ヘルシンキのフレーベルの家」では、これまでのフィンランド固有の文脈から切り離されることとなり、「ペスタロッツ=フレーベルの家」をモデルとした活動が行われることとなった。特に実践から保育者養成に至るまでの総合的な体系を構成するなど、機関としての特徴は「ペスタロッツ=フレーベルの家」を意識していることが明らかとなった。

-
- ¹ ITO, Takao. 2010. "The Introduction of Frobelism and Kindergarten in Finland Through the Age of Uno Cygnaeus", *In the Spirit of Uno Cygnaeus – Pedagogical Questions of Today and Tomorrow*, University of Jyväskylä, Department of Teacher Education. pp.157-167.
- ² 伊藤喬治、2015、『フィンランドにおける「最初の幼稚園」に関する一考察－1883年の幼稚園と1888年の幼稚園の比較から－』「大橋学園紀要」、創刊号、pp.1-17。
- ³ Menetniemi, M. 2007. "Hanna Rothman 1856-1920", *Ebeneser-säätiö, Ebeneser - 100 vuotta lasten hyväksi*. Karisto, Hämeenlinna. p.59.
- ⁴ Hänninen, S-L. & Valli, S. 1986. *Suomen Latentarhatyö ja varhaiskasvatuksen historia*, Otava, Helsinki. p.60.
- ⁵ Ibid, p.60.
- ⁶ Menetniemi, M. 2007. Ibid, p.59.
- ⁷ Hänninen, S-L. & Valli, S. 1986. Ibid, p.60.
- ⁸ Menetniemi, M. 2007. Ibid, p.60.
- ⁹ Hänninen, S-L. & Valli, S. 1986. Ibid, p.60.
- ¹⁰ Ibid, p.60.
- ¹¹ Ibid, p.60.
- ¹² Ibid, p.61.
- ¹³ 豊水清浩『フレーベル主義幼稚園の展開について』「群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編」第64巻、2015年。p.105。
- ¹⁴ 岡田正章・川野辺敏監修、1983、『世界の幼児教育5 ドイツ』、日本らいぶらり。p.85.
- ¹⁵ Hänninen, S-L. & Valli, S. 1986. Ibid, p.61.
- ¹⁶ Ibid, p.61.
- ¹⁷ Ibid, p.61.
- ¹⁸ 1890年にロートゥマンがハンミンク＝シェペルにあてた手紙の中で、「ベルリンにいた時期に、私の人生の意味は与えられたようなものです。それは私に、その能力を目覚めさせてくれた。その点については、表現する言葉が見つからないほどです。」と述べている。Ibid, p.61.
- ¹⁹ Ibid, p.62.
- ²⁰ Ibid, p.62.
- ²¹ Ibid, p.62.
- ²² Ibid, p.62.
- ²³ Ibid, p.62. また、ロシア帝国の属国であった当時のフィンランドは、1930年代に北欧全体で民族ナショナリズムが盛り上がった後も、特に1860年代にアレクサンドル2世によって自由化政策がとられた以降は、フィンランドの中で、ロシアへの危機感からナショナリズムはあらゆる点で強く残っていた。
- ²⁴ Ibid, p.62.
- ²⁵ Menetniemi, M. 2007. Ibid, p.59.
- ²⁶ Hänninen, S-L. & Valli, S. 1986. Ibid, p.62.
- ²⁷ Ibid, p.62.
- ²⁸ Ibid, p.62.
- ²⁹ シグネウスとロートゥマンは直接の交流はなかったが、このとき、ブロンクヴィストはシグネウスに、ロートゥマンの幼稚園設立への熱意について手紙を送っている。ロートゥマンの最初の幼稚園は小さなものであったが、シグネウスは自身より若い人物がこのような実践的な教育活動を行っている事を賞賛している。Ibid, p.63.
- ³⁰ Ibid, p.63.
- ³¹ Ibid, p.63.
- ³² Ibid, p.63.
- ³³ Ibid, p.64.
- ³⁴ Ibid, p.64.
- ³⁵ Ibid, p.64.

-
- ³⁶ Menetniemi, M. 2007. Ibid, p.64.
- ³⁷ Hänninen, S-L. & Valli, S. 1986. Ibid, p.65.
- ³⁸ Ibid, p.65.
- ³⁹ Ibid, p.65.
- ⁴⁰ Ibid, p.66.
- ⁴¹ Ibid, p.66.
- ⁴² Ibid, p.67.
- ⁴³ Ibid, p.67.
- ⁴⁴ しかし、ラビンラハデン通りの幼稚園は、ソルナイネンに幼稚園が移転した後も、そこに残された。Ibid, p.68.
- ⁴⁵ Pulma, P. 1987. "Kerjuuluvasta Perhekuntoutukseen. -Lapsuuden yhteiskunnallistuminen ja lastensuojelun kehitys Suomessa". *Suomen Lastensuojelun Historia*. Lastensuojelun Keskusliitto, Helsinki. p.90.
- ⁴⁶ Hänninen, S-L. & Valli, S. 1986. Ibid, p.71.
- ⁴⁷ Ibid, pp.71-72.
- ⁴⁸ Ibid, p.72.
- ⁴⁹ Ibid, p.68. また、彼女は 1891 年から 1892 年にかけてベルリンの「ペスタロッチ=フレーベルの家」の幼稚園女教員養成所に留学している。Valli, S. & Kekäläinen, A. (Ed.). 1992. *Lastentarhanseminaari Ebener. Ebeneser-säätiö*, Helsinki. p.13.
- ⁵⁰ Valli, S. & Kekäläinen, A. (Ed.). 1992. Ibid. p.15.
- ⁵¹ Hänninen, S-L. & Valli, S. 1986, ibid, p.77.
- ⁵² Niskanen, J. 2007. "Muistojen Ebeneser", *Ebeneser - 100 vuotta lasten hyväksi*. pp.85-105. Karisto, Hämeenlinna.